

令和元年度 あしたのまち・くらしづくり活動賞 主催者賞受賞

『出会い・ふれあい・支え合い』 世代間交流を促す活動

熊本県熊本市東区 NPO法人みるくらぶ

当団体の究極の目標は「安寧」な社会の創造。「安寧」な社会は、穏やかな気持ちで生活を送ることが可能とされている。私たちはその定義に則り、人々を穏やかな気持ちに誘うためには、一人一人の存在が否定されることなく、程よい人間関係が維持され、困ったときには相互に助け合えるようなつながりのある社会の実現を目指して活動している。

団体設立の契機は、孤立した育児環境が社会問題視されるようになったこと。不登校・いじめ・虐待とDV（この当時はDVの定義がなく、法も未整備。家庭内に暴力が存在していても、子どもと母親など被害の保護や救済が困難な状態）などが顕在化しはじめたことに端を発している。

これらの状況があることを踏まえ、孤立した育児環境を改善したいと強く思いみるくらぶを発足した。まずは、孤立を防ぐために「人と出

会う機会」を設ける必要性に駆り立てられ、地域内での仲間づくりを行うことから取り組み始めた。

人との関わりがあれば、精神的な安定は何より意欲を引き出すことができる、集まったメンバーは子育てを通して実感していたからである。このような認識に至り、「楽しく人とつながる」ことを念頭に置き、平成5年12月6日創設。その間、社会活動法制定により平成19年6月13日、NPO法人みるくらぶとして法人化、現在に至る（代表・市原実幸）。

活動概要

事業名「親子居場所事業」として

この事業は、健全育成を目的に子育て中の親子を対象とした安否確認と、支援の有無および

適切な支援につなげるためのアセスメントを行う場として始めた活動である。具体的には相談援助をはじめ、福祉などの情報提供と公的機関への同伴を行ってきた。日常生活で起る課題は自助努力と共助により解決できることもあると経験し痛感してきたからこそ、人との関わりがあれば、何より意欲を引き出すことが可能となる。この一念から、まずは親子同士及びメンバーが出会う機会を創出するために「親子居場所事業」として拠点を設置し活動を開始した。

その拠点を出会い、語らいの場として活用し、実態に沿った適切な支援を行うために、ニーズの把握を行うことを主旨として活動してきた。

支援する対象を親子と定義しているのは、子どもの心の安定には、保護者の精神的安定が必要不可欠だからである。

①アウトリーチによるコミュニケーション





この活動の目的は、心のケアを兼ねて被災者と出会う機会を創ること。その機会を創出するために、先述した「親子居場所事業」をアウトリーチ型支援に切り替え取り組んでいる。

また、アウトリーチに切り替えたのは、地震直後に行った巡回炊き出しと生活物資を配布したことも一因。それは、支援の必要性があるにも関わらず、適切な支援を受けられないままの状態を余儀なくされていた方々も少なくなかったからである。例えば、避難所に行くことができない高齢者世帯（寝たきりの場合）をはじめ、在宅せざるを得ない場合（病氣罹患者がいる家庭）や子育て世帯など。このような事態があることを知り、まずは被害の実態と支援ニーズの有無を明らかにする必要性に迫られたからである。

具体的な活動としては、生活物資の配布、相談援助とニーズ把握のための聞き取りなどを実践。その後は、特に子どもの心のケアを行うことにシフトし取り組んできた。巡回支援を継続

する中で、子どもの異変について、母親たちから相談を受けることが多くなったからである。子どもたちのストレス発散の機会として、イベント型アトラクション（プレイセラピー）を携行し、被害が甚大だった地域を中心に開催してきた。地震直

後の2016年6月から開始し、親子同時に楽しめる場として、継続している。（10月末日までの実施回数47回）

この機会はお会いの場として有効に機能し、被災者との信頼関係を築く手掛かりにもなった。それは、迅速適切な支援を可能にしたばかりでなく、継続した支援の必要性にも気付かされた。

支援を継続する理由は、復興へ向けた過程や取り組みを見ると明らかである。例えば、発災直後は生命の維持、次に住居などの物理的環境の整備、その後は生計維持のための経済的基盤の整備など一連の流れがあるように、次から次へと変化していくことが必至。時々刻々と変わる事態に、適切に対応することが求められるからである。しかしながら、すべての人が順調に復興へ向けて一歩を踏み出せるわけではない。先行きが見えず、立ち直る意欲を喪失したり、生計の立て直しをどうするか考えあぐねたり、孤立無援による情報不足により、復興へと向けての一歩を踏み出せないまま取り残され感を抱いている被災者も存在しているからである。特に、単身高齢者をはじめ子育て世帯など、日々の生活を営むことに追われ相談しようにもその機会や相手を見いだせず、自身の状況を語る場がない。このような社会的孤立した状況があることを知り、相談支援の必要性と継続した関わりが欠かせないからである。

***具体的に実践している活動内容**

仮設入居者と、自宅に帰宅された方々を対象

とし、在宅訪問と以下の活動を併せて行っている。

- ・見守りによる安否確認
- ・必要に応じた公的機関への取次および情報提供
- ・支援物資（飲料水・生活雑貨など）の提供

②学習サポート

この活動の目的は、学習遅滞の解消。さらに、心のケアも兼ねて実施。根拠は、巡回支援を行っている際、母親たちから異口同音に聞かされた学習の遅れに対する懸念から。

特に当時の新一年生（現在の小学校四年生）は震災が起きた際、五十音や計算の基礎学習の時期と重なり、その学習機会が震災により奪われたこと。さらに、その間学習塾へ通い学習をしていた子どもと通っていない子どもとの間に習熟格差が生じていることも明らかになり、仮設への入居が始まったのと同時に開始。

具体的には、個々の理解できない部分の弱点補習を行っている。それに加えて、毎回子どもたちの状況を確認するためのリラククスタイムを設定。おやつを準備し、雑談を交わしながら子どもの状況について適宜把握できるように努めている。同時に、保護者からの子育てや進学などについての相談にも随時応じている。

その他に、地域交流を兼ねた親子のお楽しみ会と入進学時期にはお祝いなどの会も開催。子どもたちのモチベーションアップと維持を目的にしている。

このお楽しみ会は、参加者から好評を得ている。仮設退去者あるいはみなし仮設入居者も一

堂に参加を呼び掛けて行っているのもあり、参加者同士相互の安否確認をはじめ復興に関しての支援策など、情報共有や収集の場として有効な機会となっているとのことである。

*この活動は、毎週月曜、午後4時半から6時半まで開催。宿題と自学自習を行っている。

③こころリラクゼーション講座

気持ちを穏やかに維持し、さらに人とより良くなつながらスキル獲得の機会を提供することが目的。

この講座は、地震前から継続してきた活動であるが、特に震災後は開催する必要性を切実に感じた。それは、子どもたちの心理的な抑圧が懸念されたからである。その抑圧は、各家庭の境遇（経済的・物理的）が起因して、子どもたちの関係に影響しているようにも見受けられた。

例えば、自宅再建を終えて帰宅した子どもと、仮設及びみなし仮設にいる子どもの間には小競り合いのようなトラブルが生じたこと。また、



誹謗中傷的な言動により相手を傷つけてしまうことも多々あり、子ども自身、どうすることもできないやりの場のない思いを発散することができず、悶々としている気持ちが理解できなかった。このような状況

を見据え、子どもたちの抑圧している気持ちを解きほぐすための機会が必要だと考え、協同の場としてこの講座を設定。

同じ作業を行うことで、他者理解を促し、思慮分別できる常識的な振る舞いを身に付けること。さらに、人とつながることの心地よさを実感できる機会となるよう、一人一人の子どもにも配慮しながら開催している。

この講座は、コミュニティ支援としても開催。仮設入居者同士の関係構築をはじめ、高齢者の認知症予防や孤独死を防ぐことも目的としている。

具体的には、フラワーアレンジや工作など子どもたちの年齢に応じた関心のある作業を行う機会を提供。幼稚園・保育所をはじめ小中学校の子どもを対象に、一クラス単位で開催している。

高齢者を対象にした講座は、月1回定期的に開催している。（御船町今城仮設・熊本市内高齢者施設）

今後の展開について

今後は、拠点（震災前設置していた誰でも立ち寄れる居場所『はっぴーはうす』）を、子どもの健全育成を確実に支えられる多世代交流の場所として復活・創設させたい。

言うまでもなく、現代は人とのつながりが希薄であり、孤独死や虐待など深刻な事態も頻出している。子どもの健全育成には、公的機関の支援はもとより、最も身近にいる地域社会の私

たちがつながり、自らできることをできる範囲で行うことを意識することが必要だ。そのような社会を具現化するためには、子どもはもちろん、老若男女問わず、いつでもだれでも気軽に来所でき、触れ合える場所が不可欠であると感じ、拠点を設置したいと考えている。

私たちの活動の根幹は、「人との出会い」と「助け合い」による精神的に安心できる社会の創造。

この3年間、支援活動を通じその尊さを共有できたと手ごたえを感じている。被災者の方々から「受けた恩は、今度は私たちが他の方々に返しますね」と、口々に聞かされた。このことが人々の善意の輪を広げていくことは可能であるということ、私たちメンバーに印象付け、活動継続の意欲を強く喚起させた。

この活動は特に斬新なものではない。しかしながら、日常生活の基盤を支えるには必要不可欠な活動であると自負している。それは、人との交流や温かい配慮などが精神的安定やゆとりをもたらす最も貴重なものだと考えているからである。

私たち自身が、先輩ママたちからいただいた人思いやる気持ちを善意の輪として、我々の活動で出会う子どもたちを引き継いでいきたい。それは経済優先の街づくりから一転、子どもを核にした街づくり、例えば、緩やかな人とのつながりに着目した地域社会の必要性についても提案し、実現させたいからである。

（NPO法人みるくらぶ事務局 市原由美子）